The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代新聞における語結合の慣用化
Author(s)	石井, 正彦
Citation	阪大日本語研究. 2023, 35, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』35（2023）

現代新聞における語結合の慣用化

On the conventionalization of word-combinations in modern newspapers

石井 正彦
ISHII Masahiko

キーワード：語結合、連語、動詞句、単位性、慣用化、新聞コーパス

要旨

「複数の自立的な単語の自由な結びつき」としての「語結合」には、構文活動以前に存在する社会的・所与的な単位か、構文活動の中でのみ存在する個人的・創造的な単位かという「単位性」にかかわる問題がある。本稿はこの議論に歴史的な観点を導入し、個人的・創造的な語結合が慣用化して社会的・所与的な語結合に変化するという想定の下、新聞に現れる時事的な語結合の慣用化の過程とその要因を探った。『CD- 毎日新聞記事データ集』を資料に、「不良債権」動詞句、「デフレ」動詞句、「バブル」動詞句それぞれの慣用化の過程を調査して、同じ《現実》を表す語結合がどれほど作られるのか、それらがどのような過程を経て1つの語結合に慣用化されるのか、その要因は何か、という視点から詳しい検討を行った。いずれの事例からも、《現実》を最も良く表す語結合を作り出そうという、慣用（＝専用）を目指した創造性の営みを確認することができた。

1. はじめに

表題にいう「語結合」とは、「複数の自立的な単語の自由な結びつき」の意であり、村木新次郎（1985）が「構成要素の自由な意味にささえられた語結合。『花が咲く』『酒を飲む』『ピアニストになる』『友達に本を渡す』など」とする「自由な語結合」に相当するものである。本稿では、この「語結合」が自由な結びつきでありながら慣用化するということを、現代の新聞記事を資料とするいくつかの事例をもって報告する。なお、5節の「不良債権」動詞句、6節の「デフレ」動詞句の慣用化の記述は、拙論（石井 2022）で述べたところを簡略にまとめたものであり、詳細については同論文を参照されたい。

2. 語結合の単位性

「複数の単語の自由な結びつき」としての語結合には、それが構文活動以前に存在する社会

的・所与的な単位か、構文活動の中でのみ存在する個人的・創造的な単位かという、その「単位性」にかかわる問題がある。これに関して、鈴木重幸・鈴木康之（1983）は、いわゆる教科研文法で「連語」と規定される語結合について、

> もし、連語が単語の語彙＝文法的な特性にもとづいてできあがっているとすれば、単語が文のそとに存在しているのとおなじ意味で、連語も文のそとに存在している。われわれが単語のリストをつくるのと同じ意味で、文のそとで連語のリストをつくることができる。たとえば、「ごはんを　たべる」、「うどんを　たべる」、「パンを　たべる」などなど。

として、前者の見方をとる。これに対して、宮島達夫（2005）は、

> 「青空」は、はなし手が「かれは青空をみあげた」という文をつくる以前に「かれ」や「みあげる」と同様に、あたえられたものとして言語のなかに存在する。「青い空」という連語は、はなし手が「かれは青い空を見上げた」という文をつくったときに、はじめて存在するものである。このちがいは重要であり、語構成論を構文論のなかではなく語彙論のなかに位置づける根拠である。「単語が文のそとに存在しているのとおなじ意味で、連語も文のそとに存在している」［『日本語文法・連語論』p.6］とはいえないのではないか。

として、後者の見方をとる。鈴木康之（2006）も、連語は「単語を材料にして、臨時的に自由につくりだされる名づけ的な単位である」として、後者の見方をとっている。斎藤倫明（2016）も、「連語は単語よりずっと開かれた存在ではないだろうか」と述べて、前者の見方には「無理がある」としている。

一方、城田俊（1991）は、「意味的に許され、文法的にも正しければ、すべての語は自由に結びつく」のかと問い、たとえば、「深い沈黙」「重い病気」「絶大なる支援」「決然たる抗議」のように、名詞によってその程度性を強調する形容（動）詞がある程度決まっているとか、「帽子をかぶる」「コートをはおる」「スーツを着る」「ズボンをはく」のように、身に着けるモノによって身に着ける動きを表す動詞が決まっているとかという例をあげて、単語は意味や文法だけでなく「慣用」によっても結びつき、それゆえにそうした慣用を守った文章・談話は自然で流暢なものになるとする。こうした見方は、語結合を臨時的で自由な結びつきとする見方とは対照的であり、語結合に社会性・所与性を認める見方と重なるものである。城田（1991）においては、鈴木・鈴木（1983）が例にあげた「ごはんを　たべる」も、「飲食物を消費する」という意味関係（「消費的充たしの縁」）を「めしを　くう」「昼食を　とる」「スープを　のむ」

などとともに構成する慣用的な結びつきとするなど、さまざまな意味関係（縁）を構成する数多くの結びつきがまさに「連語のリスト」として示されている。

このような語結合の単位性にかかわる対立的な見方は、Sinclair（1991）の「自由選択原理（open-choice principle）」対「イディオム原理（idiom principle）」という考え方とも重なる。前者は、言語使用者は語彙から１つ１つの単語を選び取り、それらを文法規則に従って語結合（や文）に組み合わせるという方法で言語産出を行っているとする（伝統的な）考え方をいい、後者は、語彙には単語の組み合わせである語結合がひとかたまりの（準）既成句として大量に登録されており、言語使用者はそれらを語彙から取り出して（効率的かつ自然で流暢な）言語産出を行っているとする考え方をいう。前者は語結合を文法によって組み合わせられる個人的・創造的な単位とすることにつながり、後者は語結合を語彙に登録された社会的・所与的な単位とすることにつながる。なお、Sinclair 自身は、統語的に生成されたように見える語結合も実際にはその多くが語彙に（準）既成の句として登録されており、言語使用の大部分はイディオム原理によって説明されるとしている。

3. 語結合の慣用化

語結合が社会的・所与的な単位か個人的・創造的な単位かという、このきわめて基本的な問題に上のような見解の相違があるのには、言語に創造性と慣用性という相反する性質が共存するということが関係しているように思われる。単語が所与的な単位、文が創造的な単位であるとすれば、その間に位置する語結合が両者の性質を併せ持つ、あるいは中間的な性質を持つということがあるのかもしれないし、語結合の中に所与的なものと創造的なものとが混在しているということなのかもしれない。いずれにせよ、この語結合の単位性にかかわる問題は、言語構造の論として原理的に追究される必要がある。

一方で、この問題に言語変化という歴史的な観点を持ち込めば、個人的・創造的な語結合が慣用化して社会的・所与的な語結合に変化するということも考え得る。その慣用化の過程は、まずは以下のように図式的に想定することができる。

同じ《現実》を表す語結合が盛んに作られるが、後に（次第に）、何らかの理由によって、そのうちの１つの語結合のみが専用されるようになる

語結合が個人的・創造的であるなら、同じ《現実》を表すのに多様な語結合が作られるはずであり、また、社会的・所与的であるなら、同じ《現実》を表す語結合は特定の語結合に限ら

れることが予想される。その上で、語結合が個人的・創造的なものから社会的・所与的なものに変化するというのであれば、その過程は上のように「同じ《現実》を表す多様な語結合の中からただ１つの語結合が専用されるようになること」という図式でとらえ得ると考える。そして、もし、こうした図式的想定から現実の言語資料を調査し、そこに「語結合の慣用化」と言える現象が生起していることを確認できれば、それは、語結合の単位性の問題に歴史的な観点を導入することの必要性を示す有力な材料を提示することにつながるだろう。

なお、語結合が「同じ《現実》を表す」というとき、それは「同じ名づけ的意味[1)]を表す」ということと必ずしも一致しないことに注意する必要がある。語結合には、単語と同様に、《現実（の断片）》を指し示すという機能と、それに名づける（一般的な名前を与える）という機能とがあり、「風呂に入る／風呂に浸かる／風呂を使う」「雨がやむ／雨があがる」「強い影響／深い影響／大きい影響」のように、同じ《現実》に対して異なる名づけ（＝名づけ的意味を表すこと）が可能であるからである。

4. 慣用化の調査：対象・資料・方法

上に想定したような「語結合の慣用化」現象を見出すためには、そのためのまとまった調査が必要であるが、それには前もって満たすべきいくつかの要件がある。第一に、調査は慣用化の過程を全般的に（最初から最後まで）とらえられるものでなければならない。第二に、調査は同じ《現実》を表す語結合を漏れなく収集できるものでなければならない。第三に、調査は収集した語結合の慣用化の度合いを正確にとらえられるものでなければならない。

本稿では、これらの要件を満たすために、現代の新聞記事に用いられる時事的な語結合を対象に、その慣用化を計量的に調査することにしたい。具体的には、1991 年以降の『毎日新聞』の記事を収めた『CD-毎日新聞記事データ集』[2)]を資料（コーパス）とし、この期間の時事的な語結合として《不良債権の処理》《デフレからの脱却》《バブルの崩壊》と表し得る３つの《現実》を表す語結合（動詞句）に注目して、その慣用化の度合いを測る。これらの語結合は、いずれも 1990 年ごろに始まる「平成大不況」「失われた二十年／三十年」といわれる時代のいわばキーワードであり、『CD-毎日新聞記事データ集』によってもそれぞれの慣用化の過程のほぼ全容を観察することができる。また同『データ集』は、各年の（著作権等の関係で収録できない記事を除いて）ほぼすべての記事の全文コーパスと言ってよく、そこで用いられた同じ《現実》を表す語結合を網羅的に収集することができる。

また、第三の要件については、各語結合の慣用化の度合いをその「使用率」と「使用範囲」によって測ることにする。上述の「同じ《現実》を表す多様な語結合の中からただ１つの語結

合が専用されるようになること」という想定は、「専用」という表現からもわかるように、語結合の慣用化というものを量的にとらえている。つまり、「専用される（ようになる）」とは、同じ《現実》を表す語結合の中でとりわけ数多く、かつ、広い範囲で用いられる（ようになる）ことであるから、語結合の慣用化の度合いは個々の語結合の「使用率」と「使用範囲」を比較することによって測定できるということになる。『CD-毎日新聞記事データ集』の大規模性は、この使用率と使用範囲を正確にとらえることにも貢献する。

以下、《不良債権の処理》《デフレからの脱却》《バブルの崩壊》という3つの《現実》を表す動詞句群について、それぞれの慣用化の過程を調査した結果を、とくに、同じ《現実》を表す語結合がどれほど作られるのか、それらがどのような過程を経て1つの語結合に慣用化されるのか、その要因は何か、という視点からの検討を中心に報告する。

5.「不良債権」動詞句の慣用化

「不良債権」動詞句とは、《不良債権の処理》という同じ《現実》を表す動詞句、具体的には、1990年ごろから十数年にわたって日本社会を揺るがした「不良債権問題」の報道の中で用いられた、「不良債権を処理する」をはじめとする類義の（「不良債権を＋動詞」形式の）動詞句群をさす。いま、不良債権問題の発生から収束までの20年間（1991～2010年）の『CD-毎日新聞記事データ集』から「不良債権」動詞句を集めると、以下の57種が得られる。「不良債権」の部分を「～」で表示して（以下同様）、簡単な意味分類の下に示す（カッコ内の数字は「20年間の通算使用回数」）。

①〈不良債権をなくす〉類：～を処理する（681）、～を一掃する（10）、～を片付ける（7）、～を処分する（7）、～を整理する（7）、～を解決する（6）、～を解消する（5）、～を清算する（4）、～をなくす（4）、～をきれいにする（1）、～を始末する（1）、～をゼロにする（1）、～をゼロに持っていく（1）

②〈不良債権を減らす〉類：～を減らす（34）、～を圧縮する（21）、～を半減させる（14）、～を削減する（2）、～を減少させる（1）、～を少なくする（1）、～を半分にする（1）

③〈不良債権を消す〉類：～を償却する（143）、～を消す（17）、～を落とす（16）、～を外す（9）、～を消し去る（7）、～を放棄する（7）、～を損金計上する（4）、～を引き当てる（3）、～を切り捨てる（2）、～を取り除く（2）、～をオフバランスする（1）、～をオフバランス化する（1）、～を切り落とす（1）、～を消去する（1）、～を損切りする（1）、～をちゃらにする（1）、～を棒引きする（1）、～を棒引きにする（1）

④〈不良債権を移す〉類：～を切り離す（70）、～を分離する（34）、～を移す（26）、～

を移管する（13）、～を移し替える（13）、～を付け替える（10）、～を飛ばす（7）、～を切り分ける（1）、～を外へ出す（1）、～を摘出する（1）、～を引き離す（1）、～を分散させる（1）

⑤〈不良債権を売る〉類：～を売却する（77）、～を譲渡する（4）、～を売る（3）、～を転売する（1）

⑥〈不良債権を埋める〉類：～を回収する（43）、～を穴埋めする（13）、～を埋める（1）

図1は、これら57種の「不良債権」動詞句全体の使用量（延べ）の推移に1991年以降の金融機関（銀行・信用金庫・信用組合）の破綻件数を重ねたものだが、両者の推移はよく似ており、不良債権問題の深刻化の度合いと「不良債権」動詞句の使用量とが対応している、すなわち「不良債権」動詞句が時事的な語結合であることがわかる。

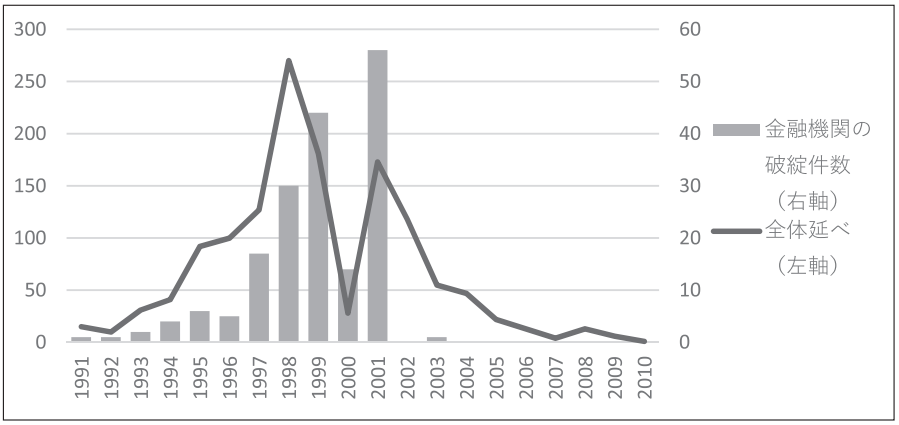

図1　「不良債権」動詞句の延べ使用量（折れ線：左軸）と金融機関の破綻件数（縦棒：右軸）

「不良債権」動詞句の全体的な推移を踏まえた上で、それらの中で「～を処理する」のみが慣用化したことを、その「使用率」と「使用範囲」の両面から確認する。

まず、使用率を見る。「不良債権」動詞句全体の延べ使用量の約75％は、「20年間の通算使用回数」上位5種の以下の動詞句によって占められている。

①「～を処理する」（681）、③「～を償却する」（143）、⑤「～を売却する」（77）、④「～を切り離す」（70）、⑥「～を回収する」（43）

図2により、これら5種の各年使用率（ある動詞句のある年の使用量がその年の「全体延べ」

に占める割合）の推移を見ると、期間のほぼ全般を通して「～を処理する」の使用率が他の動詞句を大きく上回っていることがわかる。

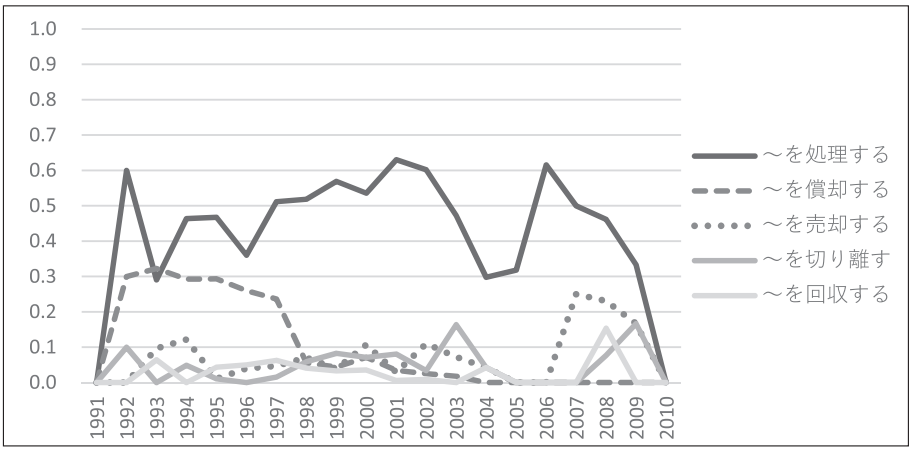

図2 「不良債権」動詞句通算使用回数上位5種の使用率

次に、使用範囲を見る。一般に「使用範囲（range）」とは、対象とする表現域がいくつかの「層」に分けられるとき、ある語や語結合がそのうちのいくつの層に現れるかを数えるものである。ここでは『CD-毎日新聞記事データ集』の「掲載面種別（以下「紙面」）」16種を「層」とみなして、各動詞句の使用範囲（1から16までの値をとる）をカウントする。

図3により、それぞれの動詞句の使用範囲である「異なり紙面数」の推移を見ると、期間のほぼ全般を通して「～を処理する」の使用範囲が他のどの動詞句よりも大きいことがわかる。

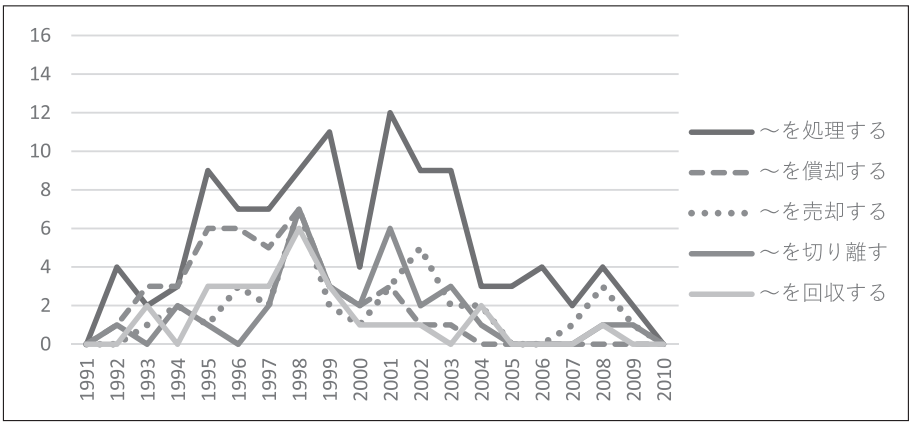

図3 「不良債権」動詞句通算使用回数上位5種の使用範囲（異なり紙面数）

以上から、「不良債権」動詞句の使用が拡大した1991年から2002年ごろまでの期間（図1参照)、「～を処理する」の使用率と使用範囲が他の動詞句に比べてきわだって大きくなったこと、すなわち、「～を処理する」が慣用化の過程をたどったことが確かめられた。その上で、「～を処理する」が慣用化した理由を、慣用化の過程の途中から対照的な推移をたどる「～を償却する」との違い（図2参照）に注目して検討する。

図4は「～を処理する」、図5は「～を償却する」の、それぞれ紙面別の延べ使用量の推移を〔経済〕と〔経済〕以外とに二分して棒グラフとし、それに図2と同じそれぞれの使用率の推移を折れ線グラフにして重ねたものである。

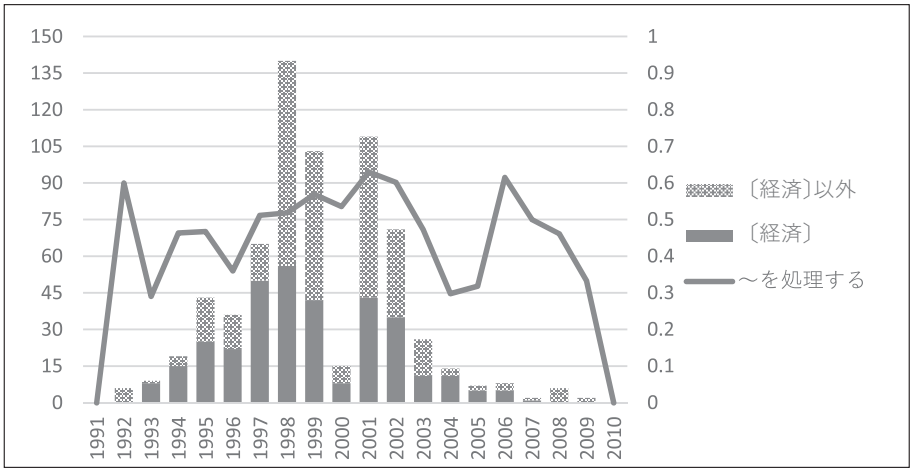

図4 「～を処理する」の紙面別延べ使用量（縦棒：左軸）と使用率（折れ線：右軸）

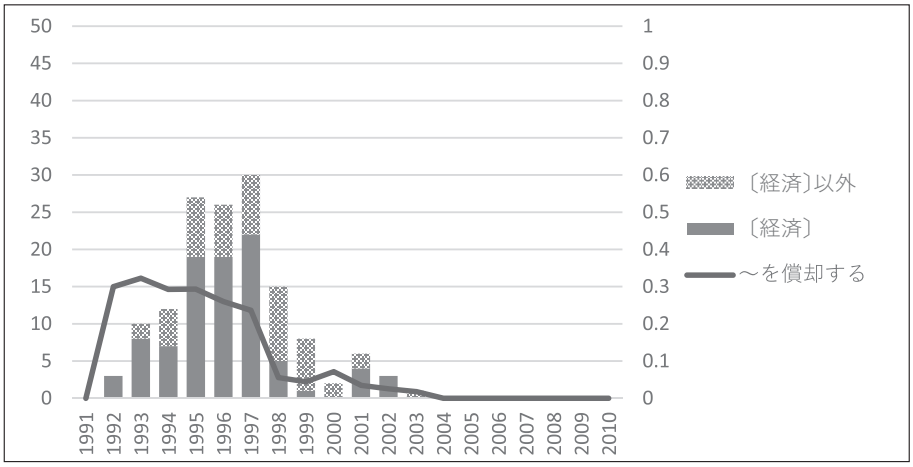

図5 「～を償却する」の紙面別延べ使用量（縦棒：左軸）と使用率（折れ線：右軸）

図4・図5を比べると、「～を処理する」「～を償却する」とも1997年までは、全体使用量が増加し、紙面別では〔経済〕の使用量が〔経済〕以外のそれを上回る状態が続くが、1998年になると、「～を処理する」の全体使用量が急増し、紙面別でも一転して〔経済〕より〔経済〕以外の使用量が多くなるのに対し、「～を償却する」の方は、紙面別では同じく〔経済〕以外の使用量が多くなるものの、全体の使用量は前年97年に比べて半減し、以降急速に減少していく。要するに、両者にとって1998年は大きな分岐点なのだが、そこで起こったのは、どちらも〔経済〕より〔経済〕以外の使用量が多くなるという現象である。

言うまでもなく「不良債権」とは経済（金融・会計）分野の専門用語であり、「不良債権を処理する」「不良債権を償却する」どちらも本来〔経済〕面で使われることの多い動詞句であるが、1995年ごろからは両者とも〔経済〕以外の紙面でも活発に使われるようになり（図3も参照）、1998年になるととりわけ「～を処理する」は〔1～3面〕〔社説〕〔総合〕〔社会〕面などで数多く使われるようになる。これは、不良債権問題が、重要な記事として〔1面〕に載ったり、〔社説〕で論評されたり、〔総合〕面で特集されたり、事故・事件を扱う〔社会〕面でもとりあげられたりすることが格段に増えた、言い換えれば、「不良債権問題」の深刻化に伴って「不良債権」を「経済問題」としてだけではなく「社会問題」として扱うようになったということを推測させるものである。

具体的には、たとえば（1）のような〔経済〕面の記事から（2）のような〔社説〕への拡大であるが、ここで「不良債権」の意味合いは、（1）の「個別の銀行の問題」から（2）の「金融機関全体の問題」に広げられ、「処理する」の意味合いも、（1）の「（銀行自身が）会計的に始末する」から（2）の「（政府が）問題を解決する」に広げられ、一般化されていることがわかる（用例中の太字は見出し。下線は引用者による）。

（1）金融再編停滞の恐れ背景に　本音は財務改善後の合併 ── 政府の資本注入への執着

（略）外資系証券会社の試算によれば、最も不良債権の引当率が高い住友銀行並みに他行が<u>不良債権を処理し</u>、その分、自己資本を減らすと仮定した場合、国内基準となっている日本債券信用銀行を除く大手18行中10行がBIS（国際決済銀行）の定めた自己資本比率8％を大きく割る。（略）　（1998年9月25日朝刊〔経済〕）

（2）小渕新政権　やはり衆院解散が必要だ ── 経済再生の「道筋」示せ

（略）とはいえ、新内閣には、やるべきことはやってもらわなければ困る。

新内閣の最重要課題が、金融システムの回復であることは論をまたない。そのためには7年間も先送りされてきた金融機関の<u>不良債権を速</u>やかに<u>処理する</u>ことが必要だ。（略）小渕首相は、自民党総裁選での「公約」で、6兆円超の恒久減税と10兆円の補正予算を前

面に打ち出した。しかし、これはピントはずれだし、何よりも順番が違う。景気対策を最優先に実行すべき時もあるが、今はそうではない。急ぐべきは銀行の健康を一日も早く取り戻すことだ。（略）（1998年7月31日〔社説〕）

このように、「不良債権問題」の深刻化に伴って「不良債権」を社会問題としてとらえるようになると、「不良債権」動詞句が担う意味も個別的・専門的なものから社会的・一般的なものに拡大することになるが、そうした意味的な拡大・一般化に対応するためには、「不良債権」という名詞が変えられないとすれば、それと結びつく動詞を一般語・（意味範囲の広い）上位語としての性格をもつものに変えていくしかない。そうした要請に応えることのできる動詞は、専門語としての性格が強い「償却する」ではなく、また、「不良債権」の具体的な処理方法を表す意味分類②～⑥の（意味範囲の狭い）下位語群でもなく、一般語・上位語としての「処理する」であったのだろう。「処理する」は、「償却する」と同じく専門語的な性格も持ち、個別的・専門的な事柄や事態を表すこともできるから、「慣用化」するにはなお都合が良かったのだと考えられる。

6.「デフレ」動詞句の慣用化

「デフレ」動詞句とは、《デフレからの脱却》という同じ《現実》を表す動詞句、すなわち1990年に始まる「バブル崩壊」をきっかけとして、日本経済が95年ごろからデフレ状態に陥り、以降20年以上にわたって長くデフレに苦しむ中で、新聞をはじめとするマスメディアが用いた「デフレから脱却する」をはじめとする類義の動詞句群をさす。具体的には、《経済の状態をデフレからそうでない状態にする意図的な行為》を表す「デフレ＋動詞」形式の動詞句で、他動詞句ばかりでなく、「主体が意志を持って自らをデフレでない状態に置くこと」を表す自動詞句も含まれる。

いま、1995年から2016年までの22年分の『CD-毎日新聞記事データ集』から「デフレ」動詞句を集めると、以下の37種が得られる。「デフレ」の部分を「～」で表示して（以下同様）、簡単な意味分類の下に示す（カッコ内の数字は「22年間の通算使用回数」）。

①〈デフレを滅ぼす〉類：～を退治する（11）、～を打ち破る（2）、～を打破する（2）、～を根絶する（1）、～を征伐する（1）

②〈デフレを消す〉類：～を解消する（27）、～を解決する（2）、～を払しょくする（2）、～を取り払う（1）

③〈デフレを終わらせる〉類：～を終息させる（3）、～を終わらせる（1）、～に終止符を打つ（1）

④〈デフレを止める〉類：～を止める（49）、～を食い止める（7）、～を阻止する（5）、～に歯止めをかける（3）

⑤〈デフレを抑える〉類：～を抑える（2）、～を抑え込む（1）、～を封じ込める（1）、～を抑制する（1）

⑥〈デフレを正す〉類：～を是正する（2）、～を改革する（1）、～を改善する（1）、～を直す（1）

⑦〈デフレに打ち勝つ〉類：～を克服する（87）、～を乗り越える（1）、～を振り切る（1）

⑧〈デフレを抜け出す〉類：～を脱却する（90）、～を脱する（10）、～を脱出する（5）、～を抜け出す（2）

⑨〈デフレから抜け出す〉類：～から脱却する（233）、～から抜け出す（34）、～から脱出する（10）、～から抜け出る（2）、～から脱する（1）、～から抜け切る（1）

図6は、これら37種の「デフレ」動詞句全体の使用量（延べ）の推移に1995年以降の日本のインフレ率を重ねたものだが、全体使用量の2003年と2013年の2つの峰は、どちらもその4年前にインフレ率がマイナスに転じ、その後しばらく続くデフレ状態が改善に向かうところで現れている。2度にわたってデフレ状態が深刻化し、その都度それに対する政策（2003年は小泉内閣、2013年は安倍内閣）が講じられる中で、マスメディアの報道量も2度にわたって増加したと考えられる。「デフレ」動詞句もまた時事的な語結合であることがわかる。

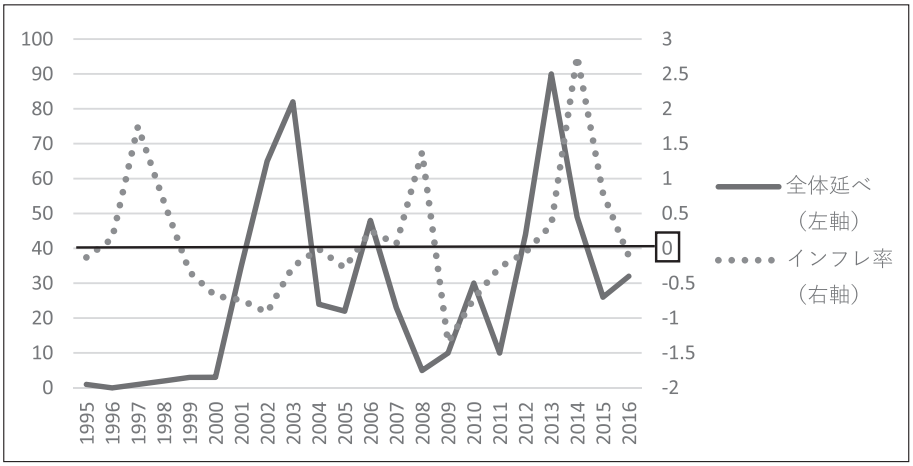

図6 「デフレ」動詞句の延べ使用量（実線：左軸）とインフレ率（破線：右軸）

「デフレ」動詞句の全体的な推移を踏まえた上で、「デフレから脱却する」という動詞句が慣用化したことを、使用率と使用範囲の両面から確認する。

まず、使用率を見る。「デフレ」動詞句全体の延べ使用量の約 80 %は、「22 年間の通算使用回数」上位5種の以下の動詞句によって占められている（正しくは第5位に「～から抜け出す」が入るが、第1位の「～脱却する」と同じ⑨に属すので除いている）。

⑨～から脱却する（233）、⑧～を脱却する（90）、⑦～を克服する（87）、④～を止める（49）、②～を解消する（27）

いま、これら5種の各年使用率の推移を、年次を全体の使用量が延べ30以上の9年分に限り、グラフの形式も、動詞句それぞれの（「全体延べ」に対する）使用率を比べる折れ線グラフではなく、5 種の動詞句の合計使用量を分母にそれぞれの比率を比べる構成比棒グラフにして示すと、図7のようになる。

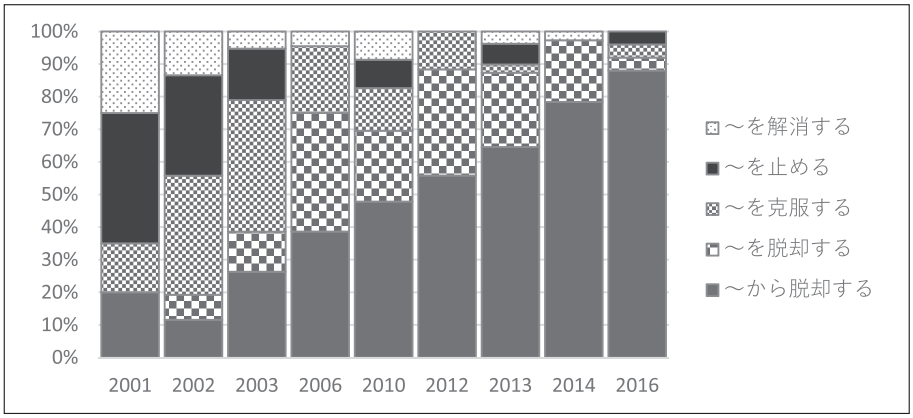

図7　「デフレ」動詞句通算使用回数上位５種の使用量構成比（延べ30以上の年次のみ）

図7を左から右に眺めると、おおよそ左上から右下に向かうようにして、

②「～を解消する」→④「～を止める」→⑦「～を克服する」→⑧「～を脱却する」→⑨「～から脱却する」

という具合に優勢な動詞句が交代し、最終的に「～から脱却する」に慣用化したことがわかる。一方、「～から脱却する」の側から見ると、この動詞句はこの期間にほぼ単調にその比率を増やし、図6の2つ目の峰に相当する2012年ごろ以降には過半となって慣用化の状態に至ったと考

えられる。

次に、使用範囲を見る。それぞれの動詞句の使用範囲である「異なり紙面数」の推移を、図7と同じ年次で構成比棒グラフにして示すと、図8のようになる。これも、図7とほぼ同じ順序で優勢な動詞句が交代し、最終的に「～から脱却する」が慣用化したことを示している。

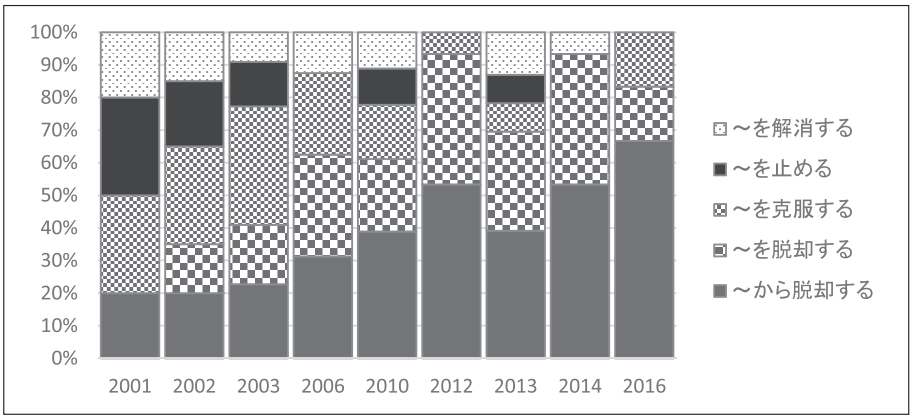

図8 「デフレ」動詞句通算使用回数上位5種の使用範囲構成比（延べ30以上の年次のみ）

以上から、「デフレ」動詞句においては、4種の動詞句がいったんは優勢になりながらも次々に交代し、最終的には「～から脱却する」が慣用化する、という過程を経ていることが確認された。以下、その理由を考えるが、注目されるのは、これらの動詞句の「語彙的他動性」（藤縄1993: 132）の強弱、すなわち「動詞の表す行為が他者＝名詞にどれほどの影響（変化）を及ぼすか」という度合いの強さである。いま、上の5種の「デフレ」動詞句を、その語彙的他動性の強いものから弱いものへと並べれば以下のようになると考えられるが、これは、「デフレ」動詞句の交代の順序とまったく同じである。

②（〈デフレを消す〉類の）「～を解消する」＞④（〈デフレを止める〉類の）「～を止める」＞⑦（〈デフレに打ち勝つ〉類の）「～を克服する」＞⑧（〈デフレを抜け出す〉類の）「～を脱却する」＞⑨（〈デフレから抜け出す〉類の）「～から脱却する」

とすれば、「デフレ」動詞句は、語彙的他動性のより強いものからより弱いものへと順次交代し、最終的に他動性の最も弱い「～から脱却する」に慣用化したことになる。こうした他動性の弱化は、名詞「デフレ」に対するとらえ方が「（消すべき）対象」から「（逃れるべき）状況」へと変化したことによるものであり、そうしたとらえ方の変化をもたらしたのは「デフレ」の長期化・深刻化であったと考えられる。要するに、「デフレ」の長期化・深刻化に伴って、「デ

フレ」に対するとらえ方が「対象」から「状況」に変化することにより、「デフレ」動詞句が他動性のより弱いものに交代し、慣用化していったのである。

なお、「デフレ」の長期化・深刻化は、「不良債権」と同様に、「デフレ」を「経済問題」だけでなく「社会問題」としても扱う方向へと変化させている。図9は、5種の動詞句がこの期間で優勢であった2年分の紙面別の使用量（延べ）を構成比棒グラフにしたものであるが、2001・02年の「～を解消する」では〔経済〕面、同じ年次の「～を止める」でも〔経済〕面と〔総合〕面（いろいろな分野の詳報・特集など）が多いのに対し、以降の「～を克服する」「～を脱却する」「～から脱却する」では、〔経済〕面だけでなく〔1～3面〕や〔社説〕にその使用が広がり、むしろ後者の紙面の方が多くなっていて、「デフレ」を単なる経済分野の問題ではなく、より深刻な社会全体の問題として扱った記事で使われていることがわかる。「デフレ」に対するとらえ方が「経済問題」から「社会問題」へ拡大するということと、「（消すべき）対象」から「（逃れるべき）状況」へ変化するということとは無関係ではない。

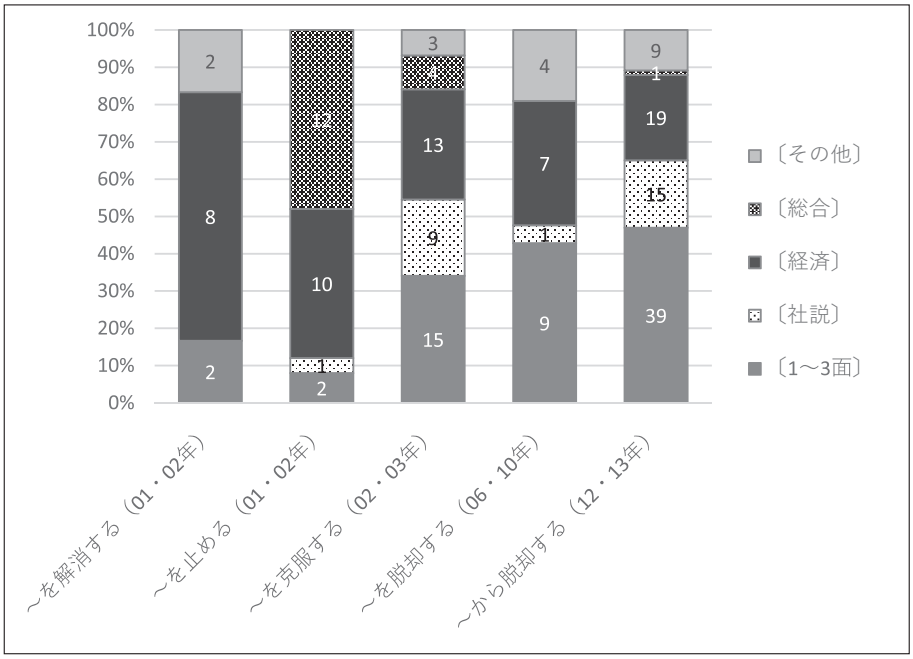

図9 「デフレ」動詞句5種の延べ使用量紙面構成比（数字は延べ、各2年分）

7.「バブル」動詞句の慣用化

「バブル」動詞句とは、《バブルの崩壊》という同じ《現実》を表す動詞句、具体的には1980年代後半に始まるバブル景気が1990年ごろに急速に後退・悪化した事態を表す、「バブルがは

じける」「バブルが崩壊する」をはじめとする類義の動詞句群をさす。

いま、1995年から2015年までの21年分の『CD-毎日新聞記事データ集』から「バブル」動詞句を集めると、以下の29種が得られる。「バブル」の部分を「～」で表示して（以下同様）、簡単な意味分類の下に示す（カッコ内の数字は「21年間の通算使用回数」）。

①〈バブルが終わる〉類：～が終わる（24）、～が去る（12）、～が終焉する（1）、～が終息する（1）、～がおさまる（1）、～がこける（1）
②〈バブルが消える〉類：～が消える（26）、～が解消する（8）、～が消滅する（6）、～が霧と消える（2）
③〈バブルがつぶれる〉類：～がつぶれる（20）、～がしぼむ（8）、～がついえる（1）
④〈バブルがはじける〉類：～がはじける（817）、～が破裂する（24）、～が破綻する（5）、～がはじけ飛ぶ（4）、～が吹き飛ぶ（1）、～がバン（1）、～がプシュッといく（1）
⑤〈バブルが砕ける〉類：～が砕ける（1）、～が砕け散る（1）
⑥〈バブルが崩れる / 壊れる〉類：～が崩壊する（385）、～が崩れる（5）、～が壊れる（2）、～が崩れ落ちる（1）、～が崩落する（1）
⑦〈バブルが落ちる〉類：～が墜落する（1）、～がはげ落ちる（1）

はじめに、これら29種の「バブル」動詞句の、全体的な使用量の推移を確認しておく。図10は、「バブル」動詞句全体の延べ使用量の推移に1980年以降の日経平均株価（年末の終値）の推移を重ねたものである。

日経平均株価は1989年に最高値を付けた後、翌90年に急落し、92年ごろまで下げ続ける。このきわめて短期間の大幅な株価急落現象がまさに《バブルの崩壊》といわれるものなのだが、「バブル」動詞句は株価が最初に大きく急落した1990年ではなく、その翌91年からいきなり年間115回というかなりの頻度で使われ始め、さらに翌92年にかけて株価が二度目に大きく下落したときにも急増して、使用量のピークを記録する。その後、株価がやや持ち直した93～95年には「バブル」動詞句の使用量も大きく減るが、97・98年ごろに株価が三たび下落すると使用量は再び増え、99年に株価がまた戻すと使用量はまた減る。このように、「バブル」動詞句の使用量は、株価が大きく下落すると増え、逆に株価がやや戻すと減るというように、株価の動きと対照的な動きを見せるのだが、2000年以降は、株価の変動にかかわらず、ほぼ一貫して減少するという推移を見せている。

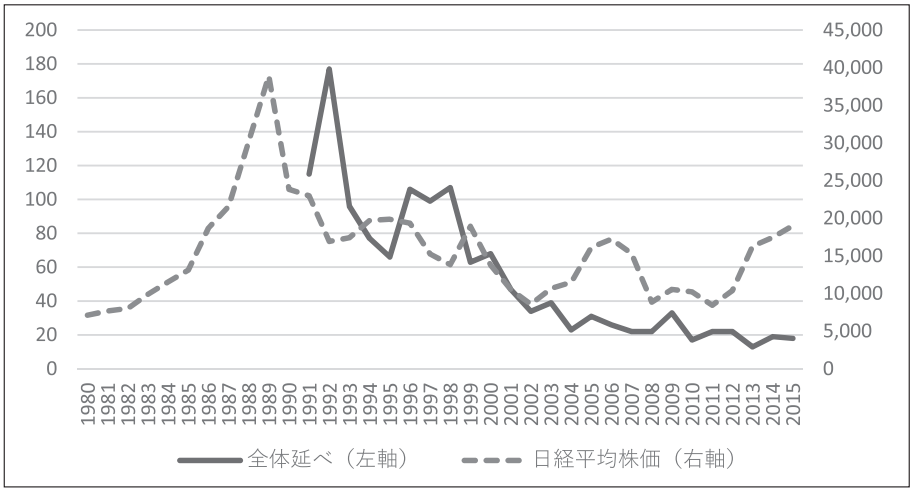

図10 「バブル」動詞句の延べ使用量（実線：左軸）と日経平均株価（破線：右軸）

ただ、このうち、「バブル」動詞句が1991年に現れていきなり多用されるという点については、『CD-毎日新聞記事データ集』が1991年版からしかなく、それ以前の使用量のデータが欠けている以上、確かなこととは言えない。そこで、1984年から記事データベースを公開している『朝日新聞』[3)]（東京本社発行の朝夕刊本紙）で「バブルが」という文字列を含む記事件数の推移を調べ、図10の『毎日新聞』における「バブル」動詞句の使用量の推移に重ねてみたのが図11である。

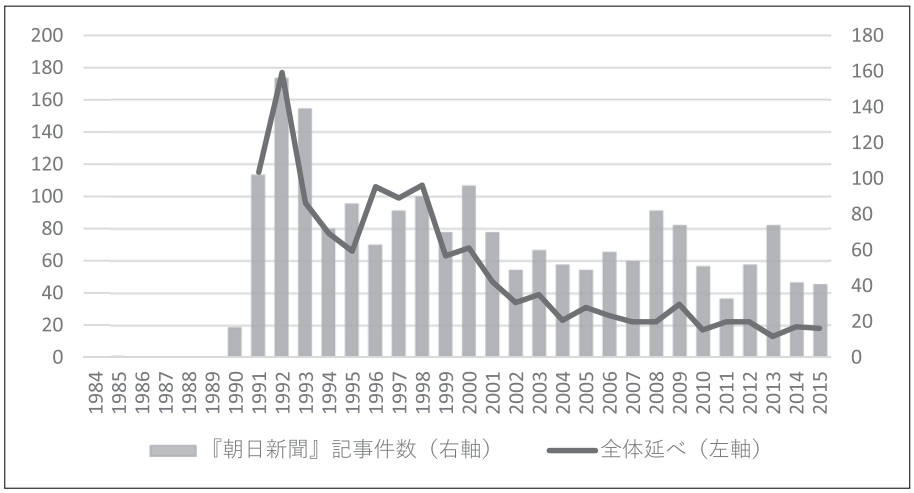

図11 「バブル」動詞句の延べ使用量（折れ線/左軸）と『朝日新聞』「バブルが」を含む記事の件数（縦棒/右軸）

これを見ると、『朝日新聞』の「バブルが」という文字列を含む記事は1990年に初めて現れるがまだ少なく、翌91年になって急増している。これは『毎日新聞』の「バブル」動詞句の動きと同じであり、したがって『毎日新聞』の「バブル」動詞句が91年から多用されていることも（それ以前のデータがないとしても）ほぼ確実であろうと考えられる。とすれば、こうした「バブル」動詞句の全体使用量の推移は、すでに見た「不良債権」動詞句や「デフレ」動詞句のそれとはかなり異なっていることがわかる。とはいえ、「バブル」動詞句の使用量が（少なくとも1999年ごろまでは）日経平均株価と対照的な推移を見せることから、「バブル」動詞句もまた「不良債権」動詞句や「デフレ」動詞句と同様、時事的な動詞句であることは間違いない。

次に、「バブル」動詞句の全体的な推移を踏まえた上で、「バブルがはじける」「バブルが崩壊する」という動詞句が慣用化したことを、使用率と使用範囲の両面から確認する。

まず、使用率を見る。「バブル」動詞句全体の延べ使用量の約95％は、「21年間の通算使用回数」上位6種の以下の動詞句によって占められている。

④～がはじける（817）、⑥～が崩壊する（385）、②～が消える（26）、①～が終わる（24）、④～が破裂する（24）、③～がつぶれる（20）

これら6種の動詞句について、図12にそれぞれの各年使用率の推移を示すと、全体を通して「～がはじける」と「～が崩壊する」の2種が大部分を占めていることがわかる。期間の初めから1994年までは、「～がはじける」が70％近くの使用率を示して「～が崩壊する」はじめ他の動詞句を圧倒しているが、95年・96年と「～がはじける」が50％程度に減少する一方、「～が崩壊する」は40％程度に増加して、両者の差が10ポイント程度に縮まる。その後は2010年までほぼこの状態が続くが、2011年に初めて「～が崩壊する」が「～がはじける」を上回り、以降両者が拮抗する状態が続く。図10で見たように2001年以降は「バブル」動詞句全体の使用量が少なくなっていることを考慮し、2000年ごろまでを「バブル」動詞句の慣用化の過程と見るなら、使用率の面からは、「～がはじける」が期間の最初から慣用化したものの、その後「～が崩壊する」が慣用化して、2種の動詞句が拮抗するようになったということが言える。

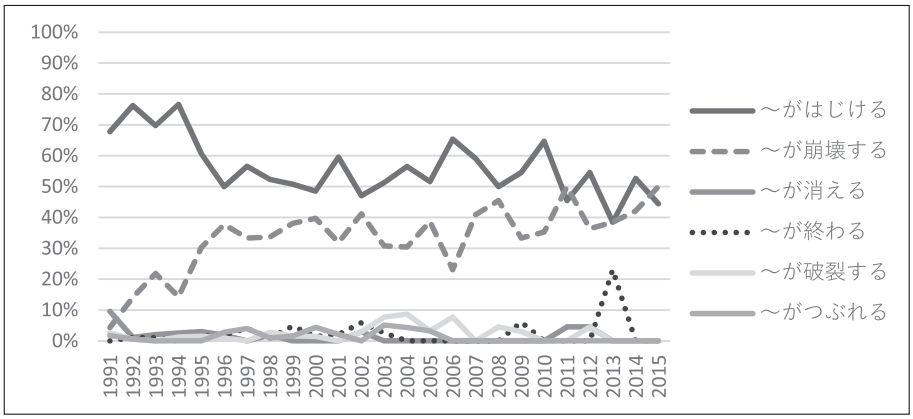

図12　「バブル」動詞句通算使用回数上位6種の使用率

続いて、使用範囲を見る。図13により、それぞれの動詞句の使用範囲である「異なり紙面数」の推移を見ると、使用率と同様、期間の初めは「～がはじける」が他を圧倒しているが、1996年までに「～がはじける」は減少、「～が崩壊する」が増加して両者の差は小さくなり、その後、「～がはじける」が「～が崩壊する」をわずかに上回りながら両者とも減少していく、という推移を見せている。上述したように、2000年ごろまでを「バブル」動詞句の慣用化の過程と見るなら、使用範囲の面からも、「～がはじける」が最初から慣用化し、その後「～が崩壊する」が慣用化して、2種の動詞句が拮抗するようになったという傾向を読み取ることができる。

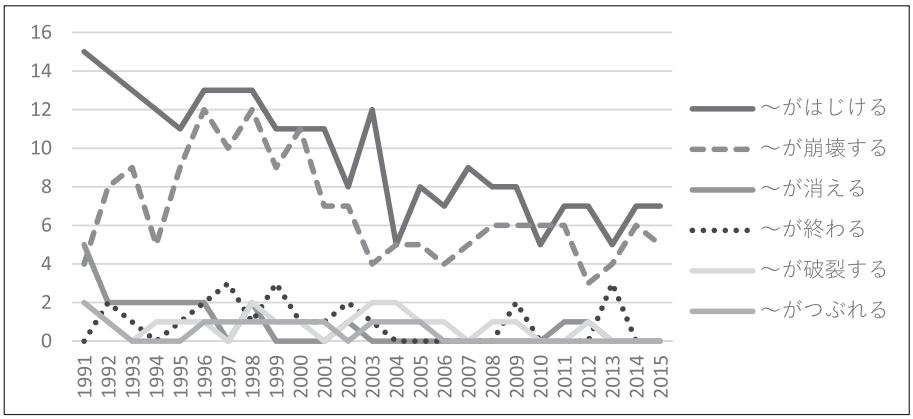

図13　「バブル」動詞句通算使用回数上位6種の使用範囲（異なり紙面数）

最後に、「バブル」動詞句が以上のような慣用化の過程をたどった理由について考える。具体的には、1）なぜ「～がはじける」が期間の最初から慣用化したのか、2）その上で、なぜ「～が崩壊する」が慣用化したのか、3）さらに、なぜ両者が拮抗し、一方のみが慣用化しないの

か、について検討する。

1）なぜ「～がはじける」が期間の最初から慣用化したのか

これには、まず、上述したように（株価急落に代表される）《バブルの崩壊》といわれる現象が1990年から92年ごろまでのきわめて短期間のできごとであったことが関係していると考えられる。非常に短期間であったために、「不良債権」動詞句や「デフレ」動詞句の場合とは違って、それを表す動詞句も一気に慣用化した、あるいは、新聞報道はじめマスメディアの側から言えば一気に慣用化させる必要があったのではないか、ということである。

また、この現象を表す動詞句を比喩を用いて作ったということも大きく関係しているものと考えられる。実体とかけ離れて膨張した経済をまずは比喩によって「バブル（泡）」と表し、次いでそれが急速に縮小するさまを「バブルがはじける」という比喩で表したものと考えられるが、これが目の前で生じた（生じている）できごとを表すのに最もふさわしい（「バブル」動詞句として「バブルが消える」などよりもふさわしい）と考えられ、また、読者ないし社会の側も比喩という二次的有縁性に助けられてこれを受け入れやすかったのではないか。その際、和語名詞「泡」を用いた動詞句「泡がはじける」という語結合が（「泡が破裂する」「泡がつぶれる」などよりも）おそらくは慣用化していたことも支えになったのではないかと考えられる。

参考までに、期間の最初の年である1991年に現れた「バブル」動詞句の月別の使用量をまとめると表1のようになる。これを見ても、3月ごろまでは「～が消える」も多いものの、「～がはじける」が最初から優勢であったことがわかる。

表1　「バブル」動詞句の1991年月別の延べ使用量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
～がはじける	4	1	10	4	3	3	2	11	11	11	7	11	78
～が消える	1	5	1		1		1	1				1	11
～が解消する		1				2	1	1				1	6
～が破裂する						1	1				1		3
～が崩壊する						1		1	2			1	5
～が消滅する						1						3	4
～がしぼむ								1					1
～が終焉する								1					1
～がつぶれる								1			1		2
～がついえる									1				1
～が墜落する									1				1
～がパン										1			1
～がはげ落ちる											1		1
計	5	7	11	4	4	8	5	17	15	12	10	17	115

2）（「～がはじける」があるのに）なぜ「～が崩壊する」が慣用化したのか

これには、漢語動詞「崩壊する」（漢語動名詞「崩壊」）の方が和語動詞「はじける」よりも「バブル」とともに名詞句や（臨時的な）複合名詞を作りやすい、ということが関係しているものと考えられる。「バブル」動詞句と同じようにして「バブル」名詞句および「バブル」複合名詞を集計すると、それぞれ表2・表3のようになるが、いずれも期間の全般にわたって「～の崩壊」「～崩壊」が他を圧倒している。

表2　「バブル」名詞句の年別延べ使用量

＼年	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	計
～の崩壊	47	90	47	51	60	58	51	40	35	34	15	11	11	7	10	3	2	2	1	3	2	3	2	1	1	587
～の破裂	6	9	1	1			1			1				1	1	1										22
～の終焉	5		1																							6
～の解消	2	1								1																4
～の破綻	1	1	1																			1				4
～の終息	2																									2
～の消滅	1																									1
～の挫折										1																1
～の壊滅																1										1
計	64	101	50	52	60	58	52	40	35	37	15	11	11	8	11	5	2	2	1	3	2	4	2	1	1	628

表3　「バブル」複合名詞の年別延べ使用量

＼年	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	計
～崩壊	154	512	419	382	415	720	650	619	432	370	381	308	303	207	178	210	129	237	175	90	74	96	103	134	84	7382
～破裂	19	8	1	3	1	1	2	7	1	1	1	3	1	4	1		2									56
～破綻	4	3	5			2	1		1	1	3	1														21
～消滅	1	2			1		3	1	1		1	1		1	1											13
～解消	3	3																								6
～崩落					2	2																				4
～壊滅								2							2											4
～終焉	1											1														2
～消失		1																								1
～霧消				1																						1
～終結									1																	1
計	182	529	425	386	419	725	656	629	436	372	386	314	304	212	182	210	131	237	175	90	74	96	103	134	84	7491

そして、この名詞句「～の崩壊」・複合名詞「～崩壊」の使用量を、動詞句「～がはじける」「～が崩壊する」のそれと重ねると図14のようになる。

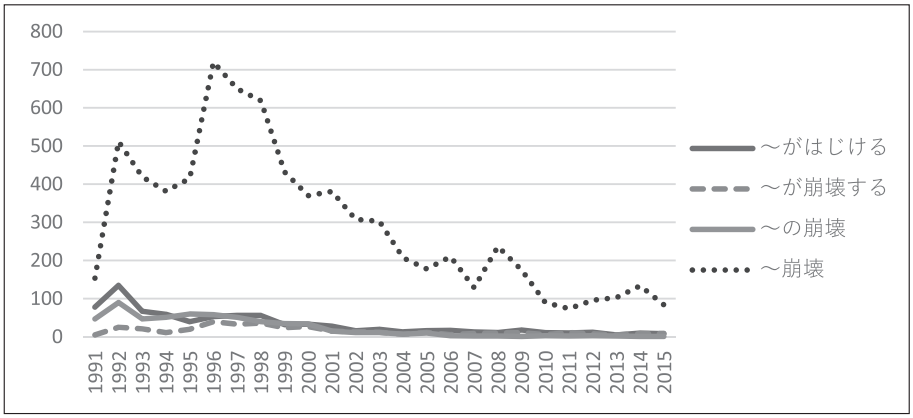

図14 「バブル」動詞句・名詞句・複合名詞の延べ使用量

これを見ると、1991年からすでに複合名詞「～崩壊」の使用量が最も多く、名詞句「～の崩壊」も（「～がはじける」よりは少ないものの）動詞句「～が崩壊する」より多くなっていることがわかる。つまり、「バブル」と「崩壊する」との語結合としては、動詞句よりも名詞句や（臨時的な）複合名詞の方が、使用量の多い初期を中心に明らかに多いのである。意味的な整合性の点から見ると、「バブル」と結びつきやすいのは「崩壊する」ではなく「はじける」の方だろうから、初めのうち、動詞句では「～がはじける」の使用量が「～が崩壊する」のそれを圧倒したと考えられる。しかし、名詞句や複合名詞を作ろうとすると、和語動詞「はじける」を使って「～のはじけ」や「～はじけ」とすることは難しく、漢語動詞「崩壊する」を使わざるを得ない。「バブル」と「崩壊する」とは意味的には整合しないが、おそらくこれには「バブル」を「バブル経済」と理解して「崩壊する」と結びつける意識が働いたものと考えられる（「経済」と「崩壊する」とは意味的に整合しやすい）。このようにして、「～崩壊」という複合名詞や「～の崩壊」という名詞句が活発に用いられると、それに対応する動詞句として「～が崩壊する」も多用されるようになっていったものと考えられる。そこには、新聞の文章語的な文体には漢語動詞の方が親和性が高いという文体的な整合性も作用した可能性があるだろう。

3）なぜ「～がはじける」と「～が崩壊する」が拮抗し、一方のみが慣用化しないのか

これには、和語動詞と漢語動詞の位相的・文体的な性格の違いにもとづく2つの動詞句の違い、すなわち、和語動詞句「～がはじける」が一般語的・口語的であるのに対し、漢語動詞句「～が崩壊する」が専門語的・文章語的であるという違いが関係しているものと考えられる。そして、この違いは、まずは2つの動詞句の紙面別の使用傾向の違いに現れる。

すでに見たように、「不良債権」動詞句や「デフレ」動詞句では、（後に慣用化する）動詞句

の使用範囲が〔経済〕から〔経済〕以外に拡大することが慣用化の契機となっていた。しかし、図15・16に見るように、「～がはじける」と「～が崩壊する」は最初期からすでに〔経済〕以外の紙面に拡大してしまっている。

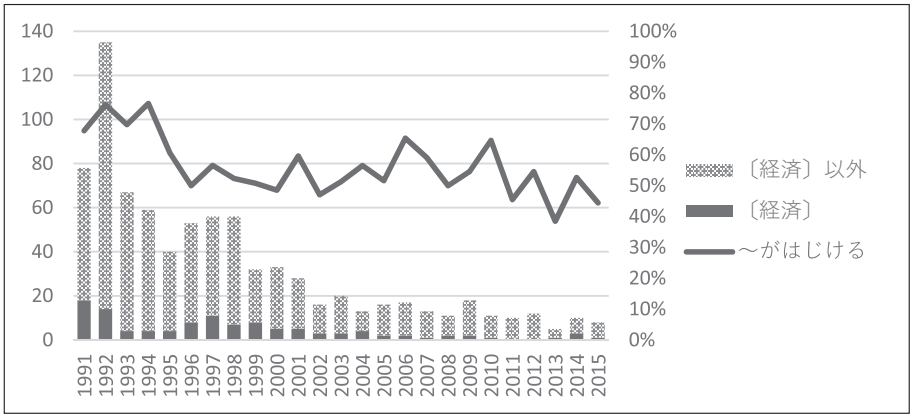

図15 「～がはじける」の紙面別使用量（縦棒：左軸）と使用率（折れ線：右軸）

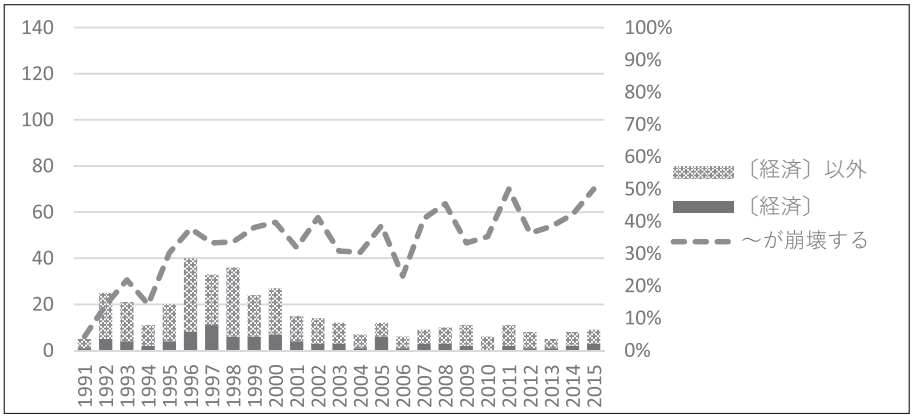

図16 「～が崩壊する」の紙面別使用量（縦棒：左軸）と使用率（折れ線：右軸）

そこで、紙面の内訳を詳しく見るために、2つの動詞句の期間全体を通した紙面別の使用量をまとめたのが表4である。ただし、ここでは、2つの動詞句の総使用量が異なるので、紙面別の「オッズ比（見込み比）」を比べることにする。この場合、ある紙面（p）のオッズ比（ω）は、以下の計算式で求めることができる。

$$\omega = (a / b) / (c / d)$$

ただし、a：紙面pの「～がはじける」の使用量

b：紙面pの「～が崩壊する」の使用量

c：p以外のすべての紙面の「～がはじける」の使用量
d：p以外のすべての紙面の「～が崩壊する」の使用量

これは、紙面pでの“「～がはじける」の使用量／「～が崩壊する」の使用量”という比が、p以外の紙面全体での同じ比の何倍あるかを示す数値である。たとえば、表4の〔1面〕のオッズ比1.40は、この紙面で「～がはじける」が使われる確率が他の紙面全体の1.40倍あることを示し、同じく〔2面〕のオッズ比0.70は、この紙面で「～がはじける」が使われる確率が他の紙面全体の0.70倍であることを示している。要するに、オッズ比が1より大きければその紙面は「～がはじける」が使われやすく、逆に1より小さければ「～が崩壊する」が使われやすいということになる。

表4 「～がはじける」「～が崩壊する」の紙面別使用量（全期間）

	1面	2面	3面	解説	社説	国際	経済	特集	総合	家庭	文化	読書	科学	芸能	スポーツ	社会	計
～がはじける	38	27	33	44	55	12	113	45	176	51	24	21	1	28	23	126	817
～が崩壊する	13	18	33	10	36	10	89	16	67	16	7	10	2	4	2	52	385
オッズ比	1.40	0.70	0.45	2.13	0.70	0.56	0.53	1.34	1.30	1.54	1.63	0.99	0.23	3.38	5.55	1.17	

このようにして、各紙面のオッズ比を比べると、「～がはじける」の方が多用される紙面（表4のオッズ比のセルが灰色のもの）には〔スポーツ〕〔芸能〕〔解説〕〔文化〕〔家庭〕〔1面〕〔特集〕〔総合〕〔社会〕があり、「～が崩壊する」の方が多用される紙面には〔3面〕〔経済〕〔国際〕〔2面〕〔社説〕〔読書〕があるという結果になる（〔科学〕は使用量が極端に少ないので除く）。新聞の紙面は基本的に「話題」の違いを反映しているから、この結果からは、「～がはじける」は社会・家庭・芸能・文化・スポーツなどの日常的・一般的な話題の紙面に多く、「～が崩壊する」は政治・経済・外交などの専門的な話題の紙面に多いということが言えそうである。また、話題ほど明確ではないが、前者の紙面はどちらかといえば口語的、後者の紙面はどちらかといえば文章語的という文体的な差異も感じられる。こうしたことには、和語は日常語・一般語に多く、漢語は専門語に多いという語種＝位相的な違い、および、和語は口語的、漢語は文章語的であるという語種＝文体的な違い、が反映しているだろう。とすれば、この2つの動詞句は、その（動詞の）位相・文体的な特徴にもとづいて、新聞紙面においてゆるやかにではあるが使い分けられている可能性がある。このことが、「～がはじける」と「～が崩壊する」とが拮抗し、一方のみが慣用化しないということに関係しているものと考えられる。

ただし、こうした紙面別の使い分けの傾向は期間全体を一括して見たものであって、紙面ごとに経年的に見ればそう単純ではない。たとえば、「～が崩壊する」が多いという点では同じ

〔経済〕と〔社説〕を比べると、オッズ比は〔経済〕の方が小さく、「～が崩壊する」がより多用される紙面であると考えられるが、2000年までの推移を比較すると（図17・18）、〔経済〕は最初期こそ「～がはじける」が多いものの、その後は2つの動詞句が拮抗して使われているのに対し、〔社説〕は、98年までは「～がはじける」が多用されているが、99年以降一気に「～が崩壊する」が多用されるようになっており、期間末にはむしろ〔社説〕の方が「～が崩壊する」の使用が多くなっている。こうした違いを説明するには、さらに詳しい検討が必要である。

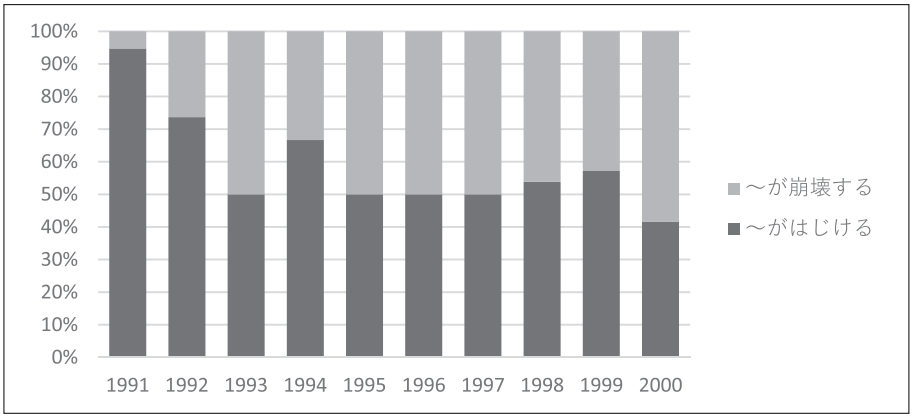

図17　〔経済〕における「～がはじける」「～が崩壊する」の延べ使用量の年別構成比

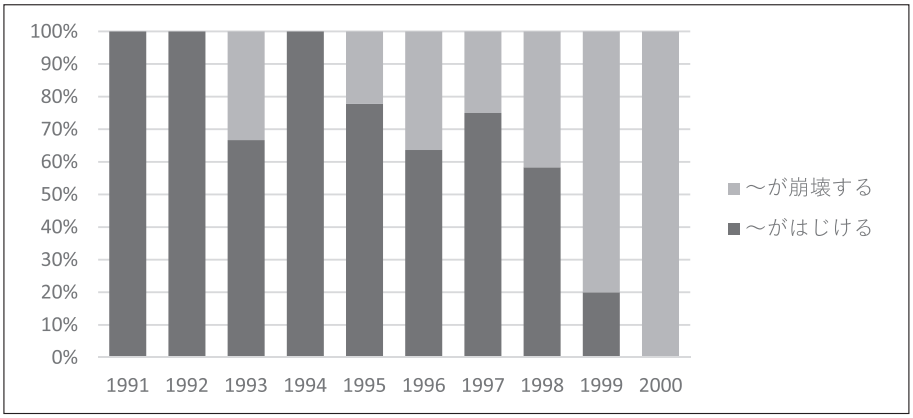

図18　〔社説〕における「～がはじける」「～が崩壊する」の延べ使用量の年別構成比

8. 語結合の創造性と慣用性

以上、1991年以降の『毎日新聞』における「不良債権」動詞句、「デフレ」動詞句、「バブル」動詞句という時事的な語結合を対象に、それぞれの慣用化の過程を調査し、とくに、同じ《現

実》を表す語結合がどれほど作られるのか、それらがどのような過程を経て１つの語結合に慣用化されるのか、その要因は何か、という点から検討を行った。

同じ《現実》を表す語結合の数は、「不良債権」動詞句57種、「デフレ」動詞句37種、「バブル」動詞句29種といずれも多く、語結合が創造的な単位であることを示す結果となった。

１つの語結合に慣用化する過程はいずれも単純ではないが、動詞句全体の延べ使用量の推移を示すグラフの形から見れば、「不良債権」動詞句は中央に頂点のある単峰性、「デフレ」動詞句は頂点が２つある双峰性、「バブル」動詞句は最初期に頂点のある単峰性であり、それぞれ、表す《現実》の内容や期間に規定されているものと考えられる。

慣用化の要因については、「不良債権」動詞句の場合は、「不良債権問題」の深刻化に伴って「不良債権」が広く社会問題としてとらえられ、「不良債権」動詞句が担う意味も個別的・専門的なものから社会的・一般的なものへと拡大したために、名詞「不良債権」と結びつく動詞に一般語・（意味範囲の広い）上位語としての性格が求められて、「～を処理する」に慣用化したものと考えられた。

「デフレ」動詞句の場合は、「デフレ」の長期化・深刻化に伴って、「デフレ」に対するとらえ方が「（なくすべき）対象」から「（逃れるべき）状況」へと変化することにより、「デフレ」動詞句も語彙的他動性のより強いものからより弱いものへと順次交代し、最終的に他動性の最も弱い「～から脱却する」に慣用化したものと考えられた。

一方、「バブル」動詞句の場合は、《バブルの崩壊》という《現実》を比喩で表した「～がはじける」が早くに慣用化したが、これには比喩のもつ二次的有縁性が支えになったと考えられる。また、その後に「～が崩壊する」が慣用化に向かったのは、「はじける」よりも名詞句や（臨時的な）複合名詞を作りやすいという理由によるものと考えられる。さらに、「～がはじける」と「～が崩壊する」が拮抗し、一方のみが慣用化しない理由には、和語動詞と漢語動詞の位相的・文体的な性格の違いにもとづく２つの動詞句のゆるやかな（紙面別の）使い分けがあるものと考えられた。

「不良債権」動詞句と「デフレ」動詞句の場合はいずれも、表す《現実》が変化したことにより、その《現実》のとらえ方が変化し、それを表すのに最適な語結合を作り出しながら、最終的に《現実》を最も良く表す（名づけの）語結合が専用されるようになったと言える。一方、「バブル」動詞句の場合は、これも比喩による名づけによって《現実》を最も良く表す語結合が作られたものの、その後、名詞句・臨時的な複合名詞との整合性、位相的・文体的な使い分けといった言語内的な作用により、それを担うのに最適な２つの語結合が併用されるようになったと考えられる。いずれにも見てとれるのは、《現実》を最も良く表す語結合を作り出そうという、慣用（＝専用）を目指した創造性の営みである。語結合の創造性というものが、多様な語

結合を数多く作るというだけでなく、《現実》を最も良く表す語結合を作り出すという働きでもあるなら、それこそが語結合を慣用化させ、社会的・所与的な単位に変化させる原動力となるのであろう。

注

1） 鈴木（1972）は、「名づけ的な意味とは、現実の断片をそれに固有な諸特徴にもとづいてさししめす意味のことである」とし、「連語とは、名づけ的な意味をもった一つの単語と、それにかかって、その名づけ的な意味を限定する一つ以上の（名づけ的な意味をもった）単語とからなりたち、全体で一つの合成的な名づけ的な意味をあらわす単位である」とする。

2）『CD-毎日新聞記事データ集』（1991～2016年版）の利用にあたっては、大阪大学大学院人文学研究科基盤日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書に従った。

3） 大阪大学が契約している「朝日新聞クロスサーチ」を利用した。

参考文献

石井正彦（2022）「語結合の“慣用化”に関する事例的検討：現代新聞における時事的な動詞句の調査から」斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ：言語研究の拡がりを見据えて』ひつじ書房、pp.103-128

斎藤倫明（2016）「『連語』と『文の成分』―教科研文法の『連語』概念の検討を通して―」『文化』80-1・2、pp.15-35

城田　俊（1991）『ことばの縁―構造語彙論の試み』リベルタ出版

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

鈴木重幸・鈴木康之（1983）「編集にあたって」言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房、pp.3-20

鈴木康之（2006）「わたくしのかんがえる連語論」『国文学　解釈と鑑賞』71-1、pp.211-197

藤縄真由美（1993）「『語彙的他動性』と『統語構造』」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』41、pp.131-144

宮島達夫（2005）「連語論の位置づけ」『国文学　解釈と鑑賞』70-7、pp.6-33

村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4-1、pp.15-27

Sinclair, J.（1991）. *Corpus, Concordance, Collocation.* Oxford University Press.

付記

本稿は、第397回日本近代語研究会2022年度秋季発表大会（2022年11月5日、オンライン開催）での講演「現代新聞における語結合の慣用化―記事データベースを用いた時事的な動詞句の調査から―」の内容をまとめたものである。

（人文学研究科教授）